コメント

古矢　旬

今日はたくさんの方にこの暑いしかも土曜日にお集まりくださいましてありがとうございました。私はこの企画を立てた者のひとりとして企画の趣旨と若干のコメントを申し述べます。今日のご報告いただいた四つのペーパーそれぞれ独立に読んでも大変面白い内容を含んでいると思いますけれども、全体と合わせると、いったい何を狙っているのかということが少しわかりにくいかもしれないので、その点から補っていきたいと思います。

この壇上にいる人々のうち四人が CPAS の所属です。木畑さんと、それからカーターさんと橋川さんと私、ということです。この企画の出発点は、これら CPAS のメンバーに関わりの深い、二つの帝国、つまり「イギリス帝国」と、これはまあ歴史学的にあまり確立した用語ではありませんけれども「アメリカ帝国」の二つについて比較検討はできないかという関心にありました。木畑さんはイギリス帝国の専門家で、私はどちらかというと現代、20 世紀のアメリカ帝国（こちらは括弧付きですけれども）を専門としておりまして、橋川さんは、これからお話しいただくように初期アメリカ、アメリカ史です。それにカーターさんがオーストラリアの文化史というわけで、ざっくばらんな話として、この四人の一見バラバラの専門を、単純に組み合わせてみると今日のタイトルになります。この足し算の結果が、The British Empire, Australia and the Americas という今日の企画です。しかしむろんただそれだけではなく、それぞれの専門の背後に非常に大きな共通の話がひそんでいます。それは一回のシンポジウムではとうてい語り尽くせないものですが、実は今日の四つのペーパーはそれぞれにこの大きな問題に、別々の角度から実証的に接近する試みになっていると思います。

それで、今日の企画の全体的背景として、私どもが思い描いているテーマを歴史にそって列挙的に描いてみますと、第一番目のテーマがイギリス帝国です。もちろんこれは今日のテーマの中で一番古い部分にあたります。このイギリス帝国自体が、第一次イギリス帝国、第二次イギリス帝国と二分されるのが普通です。ウォルター・ローリーやエリザベスの時代からだいたいアメリカ独立革命くらいまでを第一のイギリス帝国とみる見方は、最近一般的になりつつありますけれども、その第一のイギリス帝国に次いで、第二次イギリス帝国とされるのが、だいたいわれわれがふつうイメージするヴィクトリア女王の下のイギリス帝国ということになります。このふたつの帝国の連続性や継続性という大きな歴史学的テーマが一つです。

それから二つ目のテーマは、これも時代を少し下りますけれども、いわゆる「帝国主義」の時代です。つまり列強によるアフリカ、中東、アジア、オセアニア各地域の植民地化が非常に急速に進んだ時代の世界史的特徴という問題です。

それから三つ目の問題が、（第二次）イギリス帝国から「アメリカ帝国」への転換の時期と意味に関わります。言い方を変えれば、パックス・ブリタニカからパックス・アメリカーナへの転換と言ってもいいと思います。経済・軍事・安全保障、それから文化的な中心、これがすべてアメリカへ移って行く時代です。

で、四つ目のテーマが、「アメリカ帝国」の時代、「アメリカの世紀」に生まれた世界性の範囲、限界と特質と申し上げてもいいかもしれません。時代としては冷戦の開始から現在までにあたります。ただ、この「アメリカ帝国」の時代も、二つに大きく分かれています。だいたい 1970 年代のはじめ頃を境にして、冷戦と福祉国家の時代と、それからそのあとの、保守化とグローバリゼーションの時代という二つが見てとれます。最近ロバート・ライシュが、現代の金融資本主義をスーパーキャピタリズム（これは本のタイトルであり、邦訳タイトルは『暴走する資本主義』です）と規定していますが、その起源（もしくは「暴走」への助走が始まったの）は、おそらく 1970 年代はじめだろうというふうに書いています。入江昭さんも、最近、グローバル化の時代について語っており、やはりその時代はだいたい 1970 年にはじまったということをおっしゃっています。

というわけで、「アメリカ帝国」の時代、パクス・アメリカーナの時代もほぼ 1970 年くらいで二分されるとみて良さそうです。その後ずっとグローバル化が進んでいって冷戦が終わります。このように５つくらいの時代、それにサブディヴィジョンを入れるとだいたい７つ８つの時代区分の全体に関わる問題を、たった４つのペーパーで論じ尽くせるとは思えません。これは企画を立てた人間として言い訳になりますけれども、今日のシンポジウムがかなり不完全な印象を与えるとすればそういうことに起因しているのだろうと思います。

そのような前置き、ないしは言い訳をした上で、以下個別のペーパーがどのようにこの問題にアプローチしているかをかいつまんで整理したいと思います。まず、テイラー先生の論文ですが、これは非常に新しい分野を開かれたペーパーです。ある意味では、今日ここでこのペーパーをお聞きになった方達は、新しい歴史の開始に立ち会っているといってもいいと思います。実は 1990 年代のはじめくらいから、アメリカ合衆国の歴史が非常に一国主義的であるという批判がなされるようになってきました。これを最初に指摘した一人がオーストラリアのイアン・ティレルという歴史家です。彼は 1992 年にアメリカ歴史学会誌に transnational history の呼びかけともいうべき論文を発表していますが、つまり一国史を超えて、国境を越えたアメリカ史を考えようという提言を行っています。その後 15 年ほど経っていますけれども、ここ数年、アメリカ史をより国際的な視点から見直し、世界史に開く、あるいはグローバルな文脈の中でアメリカ史をもう一回考えようとする研究が続々と出てきています。ティレル自身ややニューヨーク大学のトマス・ベンダーなどの歴史家が進めてきたそうした史学史的な傾向が、今日のテイラー先生のお話の中に非常に色濃く反映しているということをまず指摘しておきたいと思います。

この論文は、アメリカ合衆国の側から見て、太平洋岸北西部を舞台にしています。従来この地域の歴史は、アメリカの西漸運動の結果、最後に開拓された地域という意味で、アメリカの大陸膨張の勝利言説の掉尾として語られることが多かった、つまりアメリカがヨーロッパ列強を尻目に、太平洋岸まで行き着き、北米大陸開拓をやり遂げた地域として語られてきたといっていいでしょう。ところが今日のテイラー先生のお話は、このパシフィック・ノースウエスト（ノースウエストということはこの地域をアメリカの東海岸から見た呼称ですね）の歴史を、逆に太平洋の側から見る、つまり太平洋の北東部（ノースイースト）として見直す試みであるといえます。アメリカ史、カナダ史からみたノースウエストを、太平洋あるいはオーストラリアの方から見るとノースイーストになる、同じ地域を

論じるにもそのように視点を変えることによって別の歴史が浮上してくる可能性がある。こうした視点や論点の転換はまだ十分になされていないかもしれませんけれども、いずれにしろこの辺境地帯の歴史を国際政治の舞台、それから国際経済の舞台、またヨーロッパ帝国の太平洋への展開過程の中に見ていく新しいアプローチがこのご報告によって提唱されているといえましょう。

この報告は、啓蒙の時代の後にきた、科学（science）と通商（commerce）という新たな人間活動を鍵とする新しい自由の帝国論です。それは、従来からいわれてきたジェファソンの「自由の帝国」論の背後に、イギリス帝国の質的転換——つまり東インド会社の独占に頼った重商主義的な帝国から、自由貿易を基調とするヴィクトリア朝の帝国への転換——という世界史的変化を見ています。アメリカ大陸の北西太平洋岸において新興国家アメリカ合衆国と先住インディアンとヨーロッパ列強とを巻き込んで展開された毛皮交易の実体を、このような世界史的文脈のうちに位置づけることによって、アメリカ史とイギリス帝国史との新しい結節点を見いだした点に、今日のテイラー先生のお話の斬新さがうかがえます。

カーター先生、ベル先生、福嶋先生のお話しは、テイラー先生の報告された時代を大きく下って、だいたい20世紀の後半という同じ時期のオーストラリアの文化や外交をテーマとされています。お三方のご報告も、そうしたテーマを一国主義的に語るのではなく、太平洋地域におけるイギリスからアメリカへの覇権の交替、その世界史的転換と関連させてオーストラリアの政治、経済、文化の自立化の意義を論じています。

カーター先生は、この地域においてイギリスの時代がどのように終わっていったのかを文化史的に明確にされている。それからベル先生はさらに時代を下らせて、さきほど言った1970年代以降のグローバル化の下でのオーストラリア文化の変容に焦点を当てておられます。そこでの変化は、これまでは通常オーストラリア文化の「アメリカ化」と見られてきましたが、ベル先生は実際にはそうではなくむしろ「ポストモダン」への移行と見るべきだと問題提起されています。

ほぼ同じ時期を扱った福嶋先生の報告は、オーストラリアの国家意識の変容に関し大変興味深い論点を提示しておられます。つまり第二次世界大戦後、オーストラリアは、冷戦と反共主義に突き動かされて、従来の対英同胞意識（福嶋先生の言葉では British race patriotism）を脱して対米接近をはかっていくのですが、変容はそこにとどまらずに対米友好を維持しつつ、オーストラリアはアジア太平洋国家という独自のアイデンティティを確立していったとされています。その文脈からは、ベル先生のお話にもありました、2000年のシドニー・オリンピックが重要な画期として浮上してきます。というのは1956年のメルボルン・オリンピックがイギリス中心的な「白豪主義」のオーストラリアを印象づけたのに対し、シドニー・オリンピックでは先住民出身の女性ランナーに脚光が当てられたことに象徴されるように、多文化的オーストラリアがテーマとされたからです。ですからこの二つのオリンピックの間に、オーストラリア社会そのものが対外的にも国内的にも非常に大きく変わったこと、そしてそれによって太平洋地域の国際関係の構図も変化したことが今日の三つのペーパーで非常にクリアに描かれたのだという風に思っています。

そこで、今日の四つのお話をブリッジしなければならないのですが、それは非常に難し

い課題だと思います。とくにですね、アラン・テイラー先生のお話と、あとの三人の方の話をどうやってブリッジするのかというのは、非常に長い橋が必要で、それを支えるいわば橋桁を学問的に供給することがはたして可能かという問題もあります。いってみれば、最初に申し上げたように、フランス革命以後の、あるいはアメリカ革命以後の太平洋世界の変容の解明が、今日のシンポジウムの全体的課題だったのですが、４つのご報告はその変容の最初の段階と最近の段階をとりあげたといえましょう。

そこで、私は各先生にもいくつか質問があるのですが、今日はほとんど触れえなかった二つの時代の間の段階にも関わり、２世紀全体を見通すためにもあるいは必要かもしれないポイントを指摘して、コメンテーターとしての責めをふさぎたいと思います。あとでもしそれについて四人の先生方がお話しになるチャンスがあればですね、お考えを聞かせていただきたいと思います。

私が今日のお話を聞いていて興味を覚えた、ひとつの問題、ないしは観点は、人の移動という要因です。つまり「帝国」という統治の方式は結局のところ、人の移動あるいは移民、という要素を抜きには成り立ちえないものだということです。非常に包括的な時空間として帝国が成立するためには人が動かなきゃならない。で、太平洋世界の近代以降の変容については、産業革命以後の交通革命の影響がきわめて大きい。つまり、非常に急速に人が動くようになった。だから、帝国の発展も衰退も、非常なスピードで進行することになった。ローマ帝国が何世紀も続いたのに、イギリス帝国は絶頂期からわずか半世紀くらいで衰退に向かったとか、あるいはイギリス帝国は四世紀か五世紀にわたって続いたのにアメリカ帝国（あるいはその覇権）は成立から一世紀もたたずに崩れて行く、といえなくもありません。人の移動とによって帝国ができ、衰退するのだとすれば、その成立と隆盛と崩壊のサイクルのスピードが、人類の移動手段の急激な発達とともに幾何級数的に増しているということは、やはり意識すべきだろうと思うのです。移動速度、つまり人やモノや情報の移動速度が現代までに飛躍的に向上してきた、そのような時代の出発点が産業革命期であり、それを生かして太平洋地域の交易の可能性を探究した先駆者たちが、マッケンジーでありクックであったといえます。ですから今日のテイラー先生の話は、国際関係のいわばインフラストラクチャーともいうべき移動手段の革新という新しい時代の夜明けを物語っていると言っていいと思います。これがひとつの論点です。つまり、移動、移民、交通運輸革命 traffic revolution です。

それから二つ目の問題が「帝国」です。世界史上実にさまざまな「帝国」が生まれては滅びていった。今日のテイラー先生のお話の中では、ラッコ（sea otter）の毛皮帝国というモノで媒介された「帝国」の広がりが提示されています。このように具体的なモノを取引することで成立している「帝国」の事例としては、綿花の例があります。綿の帝国（cotton empire）ですね。綿を通してイギリス帝国とアメリカ帝国との連関を描いた著作もあります。むろんこうしたモノの帝国と並んで、資本の帝国や文化の帝国、さらには軍事の帝国を思い描くことも可能でしょう。今日の４つの報告は、「帝国」と呼ぶか呼ばないかはおくとして、それぞれにモノやカネや文化や力などを媒介として成立する国際的な人間社会間の連関に関心を寄せています。太平洋地域に成立したそれぞれの段階の「帝国」あるいは支配の構造が、どのようなモメントに力点を置いたものだったのかということを、あらためて考えさせてくれる四つの報告だったと私は思っています。

最後に、もうひとつカーター先生もベル先生も、オーストラリアの文化的な状況は脱イギリス化を経て、さらに脱アメリカ化に進んでいるとおっしゃったように思います。その先を、ベル先生はポストモダンの段階とされるのですが、こうした「脱」や「ポスト」で文化変容を語る場合、問題になるのは、元々の local な文化、vernacular な文化が何かという点です。オーストラリア文化の vernacular だとか local というのは一体何を指すのか、そもそもそのようなものがあるのかという問題です。先住民という存在を除いた場合に、果たして vernacular だとか local というのは、オーストラリア文化にありえるのでしょうか。これはアメリカについても起こる問題です。アメリカも先住インディアンを除いた場合、なにが vernacular でなにが local か、という問題は残るのだろうと思います。で、考えてみるとオーストラリアもアメリカも、アルゼンチンもカナダもみんな、これは入植者（settlers）が作った社会を核として発展した国家です。元々あった先住民の社会を殲滅した後に、ヨーロッパからやって来た人がつくったのがこれらの社会の共通性です。そうすると、空虚なのは単にアメリカだけじゃなくてですね、オーストラリアも空虚なんじゃないか、という疑問を私は禁じ得ません。だから、ベル先生、カーター先生のお二人にお伺いしたいのは、vernacular、地方性だとかですね、方言性だとか、ローカリズムだとかっていうのは、オーストラリアでは何についていえるのかということです。個別の質問をいろいろ用意して来たんですけれども時間がきましたので、ここで止めておきます。具体的な質問は、橋川さんの方からお願いします。